東北女子大学・東北女子短期大学　紀要　No.56：17～24　2017

いじめの一起源とヨブ記の人権教育論的考察
ダミアン神父像が教えてくれるものから

佐 々 木　　隆*

An Origin of Bullying and A Consideration on the Theory of Human Rights Education on the Book of the Book of Job
From what the statue of Father Damian tells us

Takashi SASAKI*

Key words : ハンセン病　Leprosy, Hansen's disease
ダミアン神父　Father Damian
ヨブ記　The Book of Job
人権　human rights
いじめ　Bullying

はじめに

ハワイのモロカイ島でハンセン病の患者のために力を尽くし、ハンセン病にかかり、そこで亡くなったベルギー出身のダミアン神父（1840－1889）という人物がいた。病に苦しみ、希望を失った人々の中に入って殉教したことは当時の世界の人々を感動させ、聖人とまで讃えられた。

当時、モロカイ島はハンセン病患者の劣悪な条件下の強制的な隔離収容施設だった。健常者とハンセン病者の関係は、人間的な正当な扱いによって区別されるのではなく、病気であることが分かると、家族から引き離され、まるで犯罪者のように不当に扱われる差別をされた。ハンセン病が伝染性の低い病であり、今日では在宅治療が可能であることを考えると、隔離政策は異常なものに見える。これは社会的・制度的な身体的及び精神的な苦痛を与えるいじめともいえるものであった。

ダミアン神父は患者の人格と人権を守るために（宗教的な言い方をすれば「救う」ために、世俗的な言い方をすれば人間らしく生きるために）環境の改善と心のケアを行ったのである。

ダミアン神父の生き方に感動した彫刻家の舟越保武は病に侵されたダミアン神父の像を作った。しかし、その姿がかえってハンセン病についての偏見や差別を広めるという批判が起きて、1984年に埼玉県近代美術館における一般展示を控えるということになった[1]。現在はハンセン病への偏見や差別を解消するための法律の改正などの状況の変化によって1999年より再び展示されるようになった。日本の司法界でも差別待遇への反省がなされた。展示することが表現の自由となり、人権を保障することとなってきたのである。

舟越のダミアン神父像そのものはハンセン病の患者のために尽くした人物の崇高な姿を示しているとして宗教的、芸術的、高い評価を受けたのだが、それをどのように、ハンセン病を知らない人、鑑賞力の未熟な人、人権意識のない人に、否定的な評価をする人たちに、伝え、教え、理解してもらうのか。病気の意味や芸術的な意味についてなど、像の意味するものについての考察を平成28

＊東北女子大学

[1] 伊波敏男「花に逢はん」NHK出版　1997年　318–343p　ハンセン病の元患者の間でも扱いについて意見がいろいろある。

年度の上智人間学会の紀要に「舟越保武のダミアン神父像をどのように理解すればいいのか」として書き、また平成29年度の上智人間学会でもダミアン神父の「苦悩の意味について～ヨブ記を通じて考える」を発表したが、人権がどのような意識によって損なわれてゆくのか、患者の主体的な生き方についての十分な考察をすることができなかった。そこで本論文で再考察を行うものである。

ダミアン神父と患者の関係、差別と区別

ダミアン神父はミサで「あなた方ハンセン病患者は」と語り掛けていた。しかし、あなたがたと私の間には、不治と思われていた病に侵され絶望的な気持ちになっていた者とそうではない健常者という違いが厳然としてあった。いくら心を尽くしても、心をひらいて交流しても、断絶を越えることができなかった。ところが、彼も発病してからは「私たちハンセン病患者は」と語りかけられるようになった。

行政の形式的な福祉事務行為ではなく、観念的なものではなく、医者と患者という関係でもなく、身も心も患者として患者たちと立場を同じくし、それで受け入れられるようになった。多くの人の希望としての福音を伝え、神の愛や恵みを共有・共感できるようになったと言われる。

ダミアン神父は病となって患者たちと同じ状態と気持ちになれたことで、共に生き心を一つにできるようになったことを喜んだという。人権とはお互いが人間として共に生き共に活かし合うための権利（自然法）である。目に見える厳然たる違い（区別）があっても、人間としての共通性・共同性があることを認め、平等の人権を主張することは、正当なことであると自然法は認めているのである。

ダミアン神父は、亡くなる前に、「今の私の姿の写真を母には見せないでください」と頼んだという。そのことから彼は患者とただ心を一つにできたことを喜んでいただけでなく、患者の一人として病自体の苦悩と社会的な偏見と差別という苦悩も共通に経験していたのである。

彼の殉教に対し、ハイド牧師がダミアン神父の罹患は、教会の命令に従わず勝手に隔離地域に出かけ、さらに女性患者との関係によるものだと批難したことが新聞に載った。ハイド牧師は以前にダミアン神父とも面会し、彼を褒めていたこともあったのである。そんな心変りの批難に対して、作家スチーブンソンは、ダミアン神父が患者たちと生活を共にしていた時にあなたは何をしていたのかという反論と批判の文を書いたことは有名である[2]。さらにそのことについてグレアム・グリーンもダミアン神父がたとえ罪を犯していたとしても、患者たちと痛みを共感して、女性だけではなく患者たちのことも本当に愛していたのだとスチーブンソンの言葉を「キリスト教のパラドックス」[3]という文章で紹介している。

ハイド牧師の批判の原因は事実認識の誤りとハンセン病への偏見と無知によるものだったと思われるが、それにしても同じキリスト教のハイド牧師から亡くなって反論のできないダミアン神父を断罪し攻撃するような言葉が何故出て来たのだろうか。この弱い立場への攻撃には「いじめ」に通じる差別的な意識が底にあったように思われる。この場合、カトリック、プロテスタントという宗派の違いによる対立は問題になっていない。批判の原因や起源として、牧師はダミアン神父が病に罹ったことへのパリサイ的な律法の評価をしていたことが考えられる。この場合、パリサイ的な評価とは、良い行為には必ず良い結果、悪い行為には必ず悪い結果というように因果応報的な考え方を指す。極めて生真面目な考え方でもある。しかし、そこに平穏無事でいられるのは自分が正しい行いと正しい心でいるからだという自負心と自己正当化が生まれ、その反面として、そうでない人は何らかの問題を隠しているからだと考える傾向

---

[2] 小田部胤明『ダミアン神父』この本を読んで舟越保武はダミアン神父像を制作した。カトリックの神父でも患者の世話をしに行くものは少なかった。

[3] J.ロゲンドルフ編集『現代思潮とカトリシズム』創文社1959年（219－229p）

性も生まれ、さらに自らを優位とする差別意識へと変わるのである。

ウィキペディアには、ダミアン神父が当時のハンセン病患者の隔離されていたモロカイ島へ行く前に罹患していた可能性や容易に感染しやすい体質であった可能性が示されている[4]。つまり、モロカイ島でのハンセン病の救済活動の必ずしも結果ではないかもしれないと、ダミアン神父のモロカイ島での苦労を低く見させるような記述がある。これは医学的な見地とはいっても1885年の発表であり、今日の科学において再検証をする必要があるようなものであると思われる。たとえ、モロカイ島での罹患ではなくとも、ダミアン神父がハワイに赴任して以来どのような人（その中には未隔離の患者もいたであろう）にもどんなところにも出かけて行ったことの証ではないだろうか。

このようなダミアン神父への批難や評価を低めることには自然科学的な因果関係の認識だけではなく、ヨブ記におけるヨブの友の予断に基づくようなヨブへの批難に通じるものがある。ダミアン神父が既存の行政当局の不備を改善するように主張したこと、教会の患者に対する対応の不備を批判していたことがある。それでダミアン神父を身分や立場を超える傲慢で不穏当な人物とみたのではないだろうか。当局への批判は旧約聖書のヨブ記におけるヨブの神への訴えに通じる。ヨブの言った言葉への友人たちの無理解と反感の下に、社会的に顕彰された人物への妬みであるルサンチマンが、道徳的、宗教的な悪徳への因果応報という評価に姿を変えて、攻撃的な正義感情となって表われたように思われる。

ダミアン神父がハンセン病の患者のために懸命に働いていた時に受けた称賛と、罹患し亡くなりさらに称賛されるようになってから受けた批難が、ヨブ記のヨブの繁栄と称賛そして災いを受けて三人の友からの批難と類似しているのである。三人の批判者たちが友と呼ばれる以上はヨブがどんな人であるかすでに知っていたはずである。ダミアン神父の行状もハイド牧師によく知られていたはずである。ただ、この「知る」と言う意味に、正しくとか誤ってとか、浅いとか深い、広い狭いとか言う質的な違いの問題があったのである。

かつてヨブの病はハンセン病であると思われていたが、最近では重い皮膚病と言われようになった。しかし、当時その病が治らぬと思われていたハンセン病（現在は完治する）だったからこそ、ダミアン神父も舟越保武を含む一般の信者もヨブの苦しみにも共感したと思われる。本研究はヨブ記における「知る」ということの意味を理解し、理由にならぬようなことから始まる、いじめという人権問題の一面への理解にも寄与しようとするものである。

1　ヨブ記の構造

第一部　ヨブの紹介とヨブの試練（１章－２章）

序曲（散文で書かれている）

ヨブは神を畏れ、悪を遠ざける正しい人であった。その信仰が本物であるかどうか神とサタンの対話がなされる。

サタンはヨブが「利益のため」に神を信じているのではないかと疑ったのである。そこでヨブは試練にあわされることになった。ヨブは財産も家族も失うが「主は与え、主は奪う。主のみ名はほめたたえられよ」と、神を呪うこともなく罪を犯すこともなかった。

しかし、サタンはヨブ自身の身体に災いが及ばなかったから神に従順でいられたのかもしれないとさらに疑いを深める。ヨブ自身に災いが及ぶように神を促した。ヨブは病気になり苦しむ。「彼の妻は、どこまでも無垢でいるのですか、神を呪って、死ぬ方がましでしょう」とまで言った。ヨブは「おまえまで愚かなことを言うのか。わたしたちは神から、幸福を頂いたのだから、不幸もいただこうではないか。このようにして彼は唇をもって罪を犯すことをしなかった」ヨブは神を呪

[4]　ダミアン神父・ウィキペディアhttps://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%80%E3%83%9F%E3%82%A2%E3%83%B3%E7%A5%9E%E7%88%B6

うことなく信仰を全うした[5]。

この神とサタンとのやり取りから、ヨブ自身に責任のない災難や苦難が起こったということを示し、因果応報的ではない神の行いのあることが示されている。そのことをヨブもヨブの妻もヨブの友たちも知るところではない。神によるヨブの命の保障も知らない。ヨブの信仰と潔白を知っているのは神とヨブ記を読む我々読者である。これは無実の罪や咎によって悩む人を我々も非難したり否定したりしてはいないかを問うているように思われる。

第二部　ヨブの独白　見舞いに来た友たちとの論争（詩の形で書かれている）

ヨブと三人の友人たちとの討論（３章－ 31 章）は、ヨブの嘆き（２章）に対して、友たちはヨブに何らかの落ち度があって、それに対する報いを受けているのだという。ヨブが何かをした、何かをしなかったということへの応報としてこんな目（結果）にあっているのだと言う先入観に満ちた通俗的あるいはもっともらしい形式的また常識的な批難をする。ここで、我々読者がヨブ記の最初に罪なき者としてヨブが神に認められていることを忘れると、何らかの罪を多少なりとも犯している我々は苦難を受けるのは因果応報で当然であると友人たちの不当な非難を認めることになってしまう。

エリフの登場（32 章－ 37 章）（詩の形で書かれる）

三人の友がヨブを説得するどころか、かえってヨブに反駁されてしまったことに怒り、エリフはヨブを改めて批判する。苦難における教育的な意味を示す。しかし、このエリフの意見も、一般論であって、苦難において成長する人もいるが、苦難に倒れる人もいることまで考えれば、どこまで妥当性があるか疑問である。このエリフの突然の登場とエリフへの神の評価がないことから、もともとのヨブ記にはなかったろうと言われている。

神との応答（38 章－ 42 章６節）（詩の形で書かれている）

神によって神がヨブを含めすべての存在の始源であることが示される。それでヨブは抗議を止め、「わたしはあなたのことを耳にしていました。しかし、今や、この目であなたを見ています。それ故、わたしは塵と灰の上に座り、私の言葉を忌み、悔い改めます」（フランシスコ会訳）と神に帰順する。

神は三人の友（エリフも含むと思われる）発言を誤ったものとし、ヨブの発言を正しいものとした。発言と認識（知）は一つのものであり表現の仕方が考え方とも関係する。

三人の友はヨブを通じて神への謝罪を行い、神に受け入れられ許される。苦難を受けたヨブが罪人のために神に許しを請う仲介者のような役割を果たし、新約聖書における苦難を受けたイエスに似た役割を果たす。

第三部　ヨブの復活（42 章７節－ 16 節）終曲（散文で書かれる）

１　ヨブの家族は元の数となり、財産も増え、以前以上の幸せが戻ってくる

以上のようなヨブ記は昔話風の神に従順な義人ヨブの姿を描く序曲に対してなぜ神が正しい人と認めたヨブが、サタンの疑いに対して正しさを証明するために、わざわざこのような酷い苦悩を二度も経験しなければならないのかという疑問が生まれる。そして信仰を全うしたと序曲で語られた後に、友人たちからの人間的な苦しみをさらに受けることになる。

その原因となった疑問に対する問いかけをしたのが二部である。自分が何をしたから、何をしなかったから、苦難を経験しなければならないのか、いったい何のために自分は生まれてきたのかという問いかけ、もはやこれ以上苦しみにさいなまれて生きていたくない、生きている意味がどこ

[5]「父は悪人にも善人にも太陽を昇らせ、正しい者にも正しくない者にも雨を降らせてくださる」マタイ福音書5.45。これは恵みについて語られたことであるが、神は災いを悪人にも善人にも正しい者にも正しくない者にも与えるということになる。

にあるのか、死んでしまいたいという願いがなされる。それに対して、それがヨブおよびヨブの家族の生き方に対する因果応報だと一方的に主張する友人たちとの論争的な詩の形式で書かれた部分が挿入されている構造になっている。

一部分ではあるがヨブが罪を犯したかもしれない誤りやすい人間の限界を認める。そして神が創造者であることを確認する応答がなされる。どんな生にも意味があることが確認される。神はヨブの語りを正しいとして、友人たちの語りを正しくないとする。ヨブは再び元の生活に戻され、構造的には解決が付いたように見える。

２　ヨブ記の分かりにくさ。

我々はヨブ記の初めの序曲と最期の終曲の散文の物語風な部分だけを読んで分かった気になっているのではないか。ヨブの物語から不条理な試練に耐えて、何も言わないことを美徳のように考えるのは誤りである。まして、不条理を受け入れて黙って我慢すれば必ず恵みがやってくると思うのはもっと大きな誤りである。

ヨブ記の全体の大部分を占める詩で書かれた議論の部分は、なぜ、落度もなく悪いこともしていない自分がこんな苦労をするのかという訴えが中心であり、それに対する見舞いに来た三人の友人との激しい議論がなされるところである。それらを吟味するとヨブ記がすぐに答えの見える分かりやすいものではないことが分かってくる。

なぜ、ヨブの変わり果てた姿を見て嘆き悲しんだ彼らが、序曲でヨブは唇では罪を犯さなかったと言われるのに、ヨブの激しい嘆きと訴えの言葉を聞くと、神に逆らうものと見なし、手のひらを返したように攻撃的になり、苦難を因果応報としてヨブを責め立てるのであろうか。なぜヨブの苦難に耳を傾けず、事実も確認せず、苦難の意味を理解しないのであろうか。

前述したように神の罰は因果応報として与えられるものだという原則論の枠組みの中で友人たちは議論しているからである。三人の友はそれが真理であることを知っていると思い込んでいたのである。ヨブもまた人間の世界の因果応報の枠組みを認めていたが、思いがけない災難にあったことからその真理と思われいた枠組みが揺らぎ、穴が開き、因果応報を超えるものを知ったのである。

ここでヨブ記における議論について、現代のカウンセリング的な発想をすれば、三人の友には同じ対等な人間として共感することもなく、ヨブの存在を肯定せず、嘆きの言葉を傾聴しなかったので、ヨブのことを理解できなかったのである。彼らはヨブが常識を超える悲惨な現状のあまり、ヨブをヨブとしては認識できなかった。理解を超えたためヨブに共感することができなかったのである。彼らの頑なな因果応報の論理への執着は、真実を知ることよりも日常（人間の世界）の論理を守りたいと言うことのように思われる。友たちはヨブの豊かさにおいてヨブを信頼して友人であったのかもしれない。しかし、ヨブの正しさの本質を理解せず、何かの利益を得るために正しく行動することではないという信仰の本質を理解していない。つまり、ヨブ自身の生き方（信仰）を理解するという人格において友人ではなかったのである。いじめの起こるところにも集められた人間関はあっても人格的な友情がないのではないか。それで、なぜヨブは苦難を受け、苦難に対してどうしてそのような神を批判するような嘆きをするのか、その原因をヨブと共に究明し理解することができなかったのである。

その結果、ヨブとヨブの友たちは人間として平等な立場ではなくなり、一方的な上下関係となり、友たちはあたかも神の立場に立っているかのような上位に立ってヨブを弾劾する傲慢な態度となってしまったのである。それで対話が対話とならず、問題を明らかにできなくなったのである。

これはいじめをする側といじめを受ける側の関係を共感なしに第三者的に見るばあいにも似た状況が起こる。いじめられる方にも問題があるのではないかと、結果的にいじめを肯定することにさえなるのである。第三者からの二次的ないじめをいじめられた側が受けることになる。

最後に、彼ら三人の友の話は神について正しく

語らなかったと神に批判された。常識の枠の中で神という超越的な存在を推し量ったからである。同じように一方的に語るエリフの発言にヨブは反論することはないのは当然のように思われる。すでに前の三人に答えているからである。しかし、エリフに対しては正しく語られたとも正しく語られなかったとも神の評価がない。これが後から挿入された部分と言われるのももっともなことである。上からの立場から語っている点で、エリフも三人の中に含まれると思われるが、エリフの語り方は前に語った三人への批判があり、神の語り掛けにも似ているので、友人と神のヨブへの語り掛けの仲介的な意見として挿入が認められたのかもしれない。

神とサタンとの議論も一度目の試練についてだけで、二度目の試練についてサタンが納得したかどうか何も書いていないことにも通ずる。結果は一度目の試練ででていたと思われる。息子や娘が死ねば、自分も死んだように感じるのがまともな父親だからである。ある意味で、ヨブの妻や３人の友人そしてエリフの言葉を借りて納得しなかったサタンが改めて苦難の試練を与えたとすれば納得がゆくように思われる。

結局、すべては創造主である神に根拠があることが示されても、正しい人が試練にあい苦しむ意味は分かるようには語られていない。

ヨブ記はどうしてこんなに分かりにくいのか。これは日常的な枠組み（因果応報）の中で理解されてはならないので、分かりやすくてはいけないのではないかと思われる。苦悩には答えがない、あるいは答えを知ることができないゆえに苦悩であると言われる。苦難に教育的な意味があるということはエリフの部分的に正しいところである。しかし、それが誰でも知っている出来合いの日常的な知識ではない所でエリフも誤っているのである。その知るということの例として、21 章の中に出てくる「神に知識を与える」という言葉を検討する。この個所は筆者には文脈の上では唐突に出てくるように思われ、さらに、その「知識」の意味が筆者には分からなかったものである。以下ヨブの発言の部分を引用して再検討を行う。

３　ヨブ記 21 章 22 節について

並木浩一訳 2005 年注も含めて引用（注６～21）。

2:16 この通り、彼らの幸福は彼らの手中にある。邪悪な者たちの謀は、私には無縁だ。
2:17 一体、何度あっただろうか、彼[6]が邪悪な者たちの灯火を消し、彼らの上に災禍が臨み、彼が怒って彼らに滅亡[7]を割り当てたということが。
2:18 彼らが風に吹き飛ばされる藁となり、暴風に吹きさらわれる籾殻のようになればよい[8]。
2:19 神が、彼の子らのために彼[9]の富を取り置き[10]、彼らに報いを与える[11]ことを、彼は知るであろう[12]。
2:20 彼の目が滅び[13]を認識し、全能者の暴力[14]を飲めばよいものを[15]。
2:21 彼は彼が残す家に何か望むものがあるだろうか、彼の生涯の日数が打ち止めとなったその後で[16]。

6　神をさす。
7　原語ヘベル「滅亡」の意味では、ミカ二10と
8　本節には疑問詞がないが、諸訳は全体を疑問文として理解する。ここでは本文を重んじて訳出。
9　邪悪な者たち（集合概念として単数で表すことがある）
10　「富」が「精力」を意味する（二〇10の注四参照）ならば、神が子供を産出する力を衰えさせないと理解できる。諸訳は「富」の語の母音を変え、「災い」「罰」とし、神の正当な報復と解し、前節に引き続き本節をも疑問文とする。ここでは本文に従い、ヨブが現実を述べていると受け止める。
11　邪悪な者たちが良く報われるということ。
12　邪悪な者たちはそれを当然と認識する。
13　「滅び」は原語キード「破滅」（一二５他）と同義語と見ての推読。
14　神の怒りを指す。ヨブは神の自分への対応が暴力であると痛感していたので、「暴力」は大げさな表現ではなく、神の力の発動を意味した。
15　友人たちの主張の通りなら結構なことだが、現実はそうはならない。
16　悪人は家についてそれ以上に何かを望む必要はな

2:22 一体、神に知識※を教えることのできる者がいるだろうか。彼は高みにいる者たち[17]をも裁く方ではないか。
2:23 ある者は十全な繁栄を享受し[18]、平穏で、安らかに死んでゆく。
2:24 オリーブの実は乳が充ち[19]、彼の骨の髄は潤っている[20]。
2:25 しかし、ある者は苦しむ魂を抱きつつ、幸福を味わうことなしに死ぬ。
2:26 そうであるのに[21]、彼らは等しく塵に伏し、蛆が彼らを覆う。
2:27 私はあなたがたの諸々の考えを知っている、私をねじ伏せようとする企みを。
※ヨブ記は、人の知識を超える神の知識をも強調する（ヨブ 21：22）

対話的知としての人権

※の注で、並木氏は神の知識と人の知識を示すが何がどのように違うのかまで示していない。ヨブが神に教えようとする知識の内実が新共同訳の旧約聖書註解を見ても、フランシスコ会の注を見ても書いていない。神を畏れ信じる、悪を避けることこそ知識であると言われるので、神にそのような知識を与えるということは、神に神を信じなさい、神に悪から離れなさい、と神に教えるようなことになるので、それは不敬虔ではなく無意味なことになるのである。（28 章 20－28）

ここでダミアン神父の経験に戻れば、人間としての悩みを知ってもらいたい、同じ立場で痛みを共感してもらいたいという意味での知識を神に持ってもらいたいという願望である。いじめにおいても、いじめられる人間の苦しみをいじめる側のほとんどが意識していない。それを見ている人も他人事として痛みを理解しないのである。カウンセリングの方法は、上手く言葉にならないことを忍耐強く傾聴して、それによってクライエントの存在を肯定し信頼関係を形成し保ち、クライエント自身が問題を明らかにできるようにすることである。何年か経つといじめた側はいじめたことを忘れてしまうのは、自分がどんなことをやったのかその意味を理解できないからである。神は人間のような身体を持たない故に人間の肉の痛みは知らないと思われる。しかし、23 節と 25 節の対比において、神はこの世の不条理も人間以上に別の仕方で知っているという認識から、人間の肉の苦悩への知識（共感がある）ということにヨブは気付いていて「知識を与えることが出来ようか」と反語的に言うようになったのであろう。人間は自らの苦悩すら、原因を知らない、意味を理解していないことがあっても、神は人間の肉の苦しみを知って理解している。このことが示されるのは新約聖書のイエス・キリストの死（神の死）において示されることになると思われる。

ここでは神はヨブの存在の根拠まで知っていることにおいてヨブの肉の苦しみまで知っていることが示されている。苦悩を耐えて生きることに意味を神は与えているのだと言うことが筆者の読み取ったものである。そのことを神との対話に至るまで知らなかったゆえにヨブは知において正しくなかったということになるように思われる。無知であることの罪である。それに対して、ヨブの三人の友そしてエリフはそのような肉と結びついた知識を持とうとしなかったために、ある意味で肉体を持たない天使の立場に立つことになったのである。人間を超えた立場で知っているという態度を変えなかったことにより重い無知の罪があることになる。自分自身のことを棚に上げているの

く、安んじて死ぬことができる。諸訳は本節を、限られた人生を生きる人は、死後、家族がどうなるかかまっていられないという、否定的な内容として理解する。

[17] 天上の神的な存在者たち。

[18] 字義通りには「ある者は完全な骨のうちに死ぬ」。「骨」が「活力」の座であることについては二〇11の注参照。ここでは、晩年に至るまで活力が衰えていなかったことを意味する。

[19] 「オリーブの実」に当たる語はここのみの使用で、意味不明のため、さまざまな子音字を変え、多様な訳出が試みられている。以下略。

[20] 前節の注一三参照。

[21] 「そうであるに」文脈は上の補語。

で、人間である自己を省みていないのである。汝自身を知れと言う言葉への無知なのである。それが「天にある物（天使）さえも裁く」という言葉において示されているように思われる。

彼らはヨブの不幸から因果応報という思考の枠組みを事実の検証なしに当てはめ、ヨブの苦悩を因果応報の結果であると一方的に断言し、ヨブを怒らせさらに苦しめたのである。事実を確認もせず、いじめはいじめられた方にも問題があるのではないかと、いじめを正当化する言説があるが、当事者でさえすべてを知らないことを知っているつもりになっている。ヨブの友たちは自らの無知と偏見に気付かないために、キリスト教における大罪である傲慢の罪を犯していることになる。

難解なヨブ記の詩の形で書かれたヨブの訴えの部分を抜けば、昔話風に、理不尽な神の与えた不幸、神の奪った幸福という苦難をひたすら耐えたおかげで、神によって再び恵まれた生活を取り戻したというだけのことになってしまう。いじめられ、差別される人間に何も言わないで我慢しろと忍耐の美徳を説くことになってしまうのである。

キリスト教を含めた宗教は苦難に対して癒しを与える努力をしてきたが、苦難を与える者に抵抗するのではなく、苦難を受け入れ、諦めさせてきたように思われる。しかし、ヨブ記は苦痛からの解放を訴えることを発言して良いことを示している。自己責任だということで沈黙を強いられる必要はないのである。

通俗的な道徳の枠の中に納まっている三人の友の信仰では、苦難には神からの罰としての意味があるということを認めても、それを受ければ自然の摂理、因果応報として苦難の見返りとして恵みが返ってくるというものになってしまうのである。ヨブ記も散文で書かれた部分だけを読めばそのように解される。それ故に、ただ自分の非、至らぬところを納得しないまま認めて、黙って耐えろと友人たちが言うことは、苦悩を通じて、生きる意味を問い、苦悩の意味を問い、それを分かろうとすることを否定することになるのである。神はそれが間違いであると言っているのである。

社会的に弱い立場にある人、少数者らへ、因果応報の世間常識に従った自己責任論などを唱えるのではなく、苦悩への深い共感と理性的な吟味を通じて、苦悩の原因と意味を知らなければならない、自分自身を知ろうとすることで、ヨブは神と出会えたように、ダミアン神父も神に出会えたではないか、そのようにヨブ記の議論は教えていると思われる。神との出会いを我々の経験に換言すれば、批難する側も非難される側も共に対話を通じて互いの無知に気付き自分自身を知ることによって人権は守られるようになるのではないだろうか。

参考文献

聖書　日本聖書協会訳 1955 年　日本聖書協会
共同訳日本聖書協会 1985 年　日本聖書協会
フランシスコ会訳 2011 年　三省堂
『ヨブ記』関根正雄訳　岩波クラシックス　岩波書店 1983 年
『旧約聖書〈4〉』諸書―詩篇・ヨブ記・箴言・ルツ記旧約聖書翻訳委員会 (翻訳) 岩波書店 2005 年
浅野順一「ヨブ記」岩波新書　1971 年
浅野順一「ヨブ記註解」Ⅰ からⅢ昭和 52 年
マルティン・ブーバー『預言者の信仰Ⅱ』みすず書房昭和 43 年
なだいなだ「いじめを考える」岩波ジュニア新書 1996 年
小田部胤明『ダミアン神父』改訂版　中央出版社 1993 年
舟越保武『巨石と花びら』筑摩書房　1982 年
荒井英子『ハンセン病とキリスト教』岩波書店 1996 年
荒井英子『弱さを絆に』教文館　2011 年
ハンセン病と人権を考える会『ハンセン病と人権』解放出版社 2000 年
伊波敏男『花に逢はん』NHK 出版　1997 年
伊波敏男『ハンセン病を生きて』岩波書店　2007 年
大野哲夫『ハンセン病講義』現代書館　2013 年
ドリアン助川『あん』ポプラ社　2015 年
高木智子『隔離の記憶』彩流社　2015 年
武田徹『隔離という病』講談社　1997 年
玉光順正『小笠原登』真宗大谷派（東大寺出版部）2003 年
三宅一志『差別者のボクに捧げる！』晩聲社 1981 年